

「関係機関との連携Ⅱ」グループ

I 研究の目的

〈平成30年度〉

- (1) 関係諸機関、特に病院関係者及び患者やその家族に対し、啓発活動の一層の充実を図ることにより、病院内における教育活動推進に資する。
- (2) 疾病を含め、多様化する児童生徒の実態に即した支援方法を学び実践に生かす。

〈令和元年度〉

疾病を含め、多様化する児童生徒の実態に即した支援方法を学び実践に生かす。

II 研究の内容

〈平成30年度〉

- (1) 学習室啓発用ポスター試作品の検討（見直し）、完成。
- (2) 精神科領域の疾患により入院中の児童生徒のほか、入院加療の直接的な原因となった疾患以外に心理面・行動面で特別な配慮を要する児童生徒への支援の在り方についての研修。

〈令和元年度〉

- (1) 医療や居住地校との連携について、昨年度、他病院や研修会から学んだことを基に実践を行う。
- (2) 特別な支援を必要とする児童生徒またはその保護者への支援の在り方や配慮についての研修を行い、具体的な支援の方法を学ぶ。

III 研究の方法

〈平成30年度〉

- (1) 病院内で学校教育を行う他病院等の先進例に学ぶ。
- (2) 心理面・行動面で特別な配慮を要する児童生徒への支援の在り方については、医師（精神科）や病棟師長を講師に迎えて研修会を実施する。

〈令和元年度〉

- (1) 医療や居住地校との連携について実践をまとめ、検討会を行う。
- (2) 小児病棟の医師を講師に迎えて研修会を実施する。

IV 研究計画

月	平成30年度	月	令和元年度
5	研究内容・研究計画の立案 ・前年度までの成果と課題を受けて、 主な研究内容等の確認	5	研究内容・研究計画の立案 ・今年度の研究内容・研究計画・研究方法の 確認
		6	研修内容の検討 ・テーマや内容、講師について検討
6 ～ 7	学習室啓発用ポスター仕上げ ・昨年度末時点での試作品の修正 他校の実践から学ぶ ・岩手県立中部病院内の院内学級の見 学	7	実践検討について ・実践検討会の進め方、対象児童生徒の確認
		8	研修会について ・テーマや内容、講師、日時について確認 実践検討会① ・対象生徒の実態について、実践内容の確認
8	全体研究会①（中間報告） ・中間発表	9	実践検討会② ・実践の進め方について確認 ・これまでの連携について確認 ・今後の連携について検討
		12	実践検討会③ ・これまでの連携について確認 研修会 ・医師による講話 実践検討会④ ・まとめ（成果と課題） 研究紀要作成の分担
12 ～ 3	グループ研修会 ・医師、病棟師長による講話、意見交 換等 研修会への参加 ・他病院における教育実践に学ぶ 今年度のまとめ ・実践の振り返り（成果と課題の確認、 全体研究会へ向けての原稿準備等）	12	実践検討会③ ・これまでの連携について確認 研修会 ・医師による講話 実践検討会④ ・まとめ（成果と課題） 研究紀要作成の分担
		3	全体研究会②（今年度のまとめ発表） ・研究成果発表
3	全体研究会②（今年度のまとめ発表） ・研究成果発表	1	今年度のまとめ ・研究紀要の検討
		2	全体研究会 ・今年度の研究のまとめ

V 平成30年度の実践

1 実践内容

(1) 学習室啓発に関わること

入院中の学齢児童生徒とその保護者のみならず病院関係者などに対し、院内で訪問教育が行われていることを広く周知するため、学習室を紹介する情報発信の方法として啓発ポスターの試作を重ねた。完成したポスターは、関係病棟に掲示するに至った。

(2) 他病院の実践に学ぶ

① 第3回小児造血細胞移植セミナーから学ぶ

東海大学医学部附属病院が主催する第3回小児造血細胞移植セミナーに参加し、同病院看護師や同病院で訪問教育にあたる教諭など、それぞれの立場による実践紹介や、参加した全国各地の病院看護師、教師との情報交換により、医療と教育との連携に関わる先進事例を学んだ。

② 岩手県立花巻清風支援学校北上分教室から学ぶ

病院訪問教育として小中学校に準ずる教育を行っている岩手県立花巻清風支援学校北上分教室を訪問のうえ、分教室運営の概要説明を受けて情報交換を行ったほか、医大附属病院移転に鑑みて新医大学習室への移行準備の参考に資するよう施設設備面を見学させていただいた。

③ 研修会1・2

「発達障害等により心理、行動面で配慮を要する学齢の患者様への医療・教育の連携の在り方について」とのテーマで、学習室と関わりのある脳神経外科病棟師長と精神科医師をそれぞれ招き、研修会を行った。

<脳神経外科病棟師長を講師に実施した研修1>

講話では、脳神経外科病棟の概要を説明いただいたのち、看護の姿勢や特に学齢の患者様に対し心掛けている配慮点や医療従事者としての思いや願いを学んだ。

<精神科医を講師に実施した研修2>

自閉スペクトラム症について、その特徴や症状の発展と経過成長過程に応じた支援の方法などを具体的な臨床例をもとに説明していただいた。

2 平成30年度のまとめ

(1) 成果

① 学習室啓発に関わること

- ・完成した学習室啓発ポスターを関係病棟に掲示することにより、広く学習室の存在を知っていただくことができたほか、利用希望や相談してみたいとの希望がある方については、まずは病棟師長に申し入れるところから始まることが周知されつつある。

② 他病院の実践に学ぶ

<第3回小児造血細胞移植セミナーから学ぶ>

- ・当該セミナーは、小児科病棟から紹介いただき参加に至ったもので、医教間の関係が良好に保たれているからこそであり、感謝するとともに今後も連携を深めたい。
- ・入院中の児童生徒への教育の実際について、全国の現状を知るとともに先進例から学ぶことができた。また、少人数でのグループスタディでは、紹介した本校の例について画期的な取り組みであるとの評価を受け、誇りをもち更に向上心をもって実践に当たるべく意欲を高めることができた。

<岩手県立花巻清風支援学校北上分教室から学ぶ>

- ・北上分教室は、本校を除き病院内に学習室をもち小中学校に準ずる教育を行う唯一の学校であるものの、これまで二校間で情報交換など交流の機会はなかったが、病院、病棟との連携や授業対応上の課題や工夫点について改善のための示唆を得ることができた。
- ・可動式黒板や病院内の教室ならではの収納什器等やその配置の仕方を実際に見学させていただき、設計図段階の新学習室をイメージする助けとなった。

③ 研修会1・2

<脳神経外科病棟師長を講師に実施した研修1>

- ・病棟の概要や看護体制等について学べたことはもとより、SNSの普及等により病棟を越えた保護者間のネットワークが急速に構築されている実情から、情報伝達の誤りや対応の不備が一気に拡散する可能性があるため、従前以上に危機感をもち慎重に対応する必要を実感している点で深く共感し合うことができた。
- ・患者様の生活の質の向上のために、誠意をもち熱心に努める姿勢に共感するとともに、病棟での配慮や支援があつてこそ学習室が成り立っていることを実感し、本研究における「連携すべき相手のことを知り、理解する」との理念に迫ることができた。

<精神科医を講師に実施した研修2>

- ・実際に対応している児童生徒をイメージできる内容であり、理解の助けとなった。
- ・「自信をもった大人になってもらうのが目標」「自立とは適切な時に適切な相手に適切な言葉で助けを求められるようになること」「医療（精神科医）は患児と親をつなぐ役割をもち、親と学校をつなぐ役割をもっている」等々の言葉から講師の理念や使命感を感じ取り、深く共感することができた。
- ・児童生徒に対し、より良いサービスの提供、また支援を行うために、医療と教育の連携をより強固なものにしていこうとの思いを確認し合うことができた。

(2) 課題

① 学習室啓発に関わること

- ・ポスターは必要に応じて内容や掲載写真を更新し引き続き掲示させていただくこととし、病院公式ウェブサイトを活用させていただく啓発方法は、令和2年度に移管する学校であらためて検討したい。

② 他病院の実践に学ぶ

このあとも、先進校の実践から学び、模範とする支援内容があれば検討のうえ迅速に取り入れることとする。

③ 研修会1・2

病気理解に努めることと生活の場となっている病棟内での様子を知ることは実態把握の基本であることから、今後も病棟関係者を講師に招いての研修会開催を出来る限り継続したい。

VI 令和元年度の実践

1 実践事例検討

1) 実践事例検討について

昨年度、他病院の実践や研修会から学んだことを基に、今年度は、医療や居住地校、保護者との連携について、実践事例検討を行うこととした。

(1) 学習室利用の実態

学習室の利用期間については、病状等により様々であるが、主に5～6ヶ月の入院期間となる児童生徒が多い。また、入院後すぐ利用する場合もあれば、気持ちが落ち着いてから利用となる場合もある。

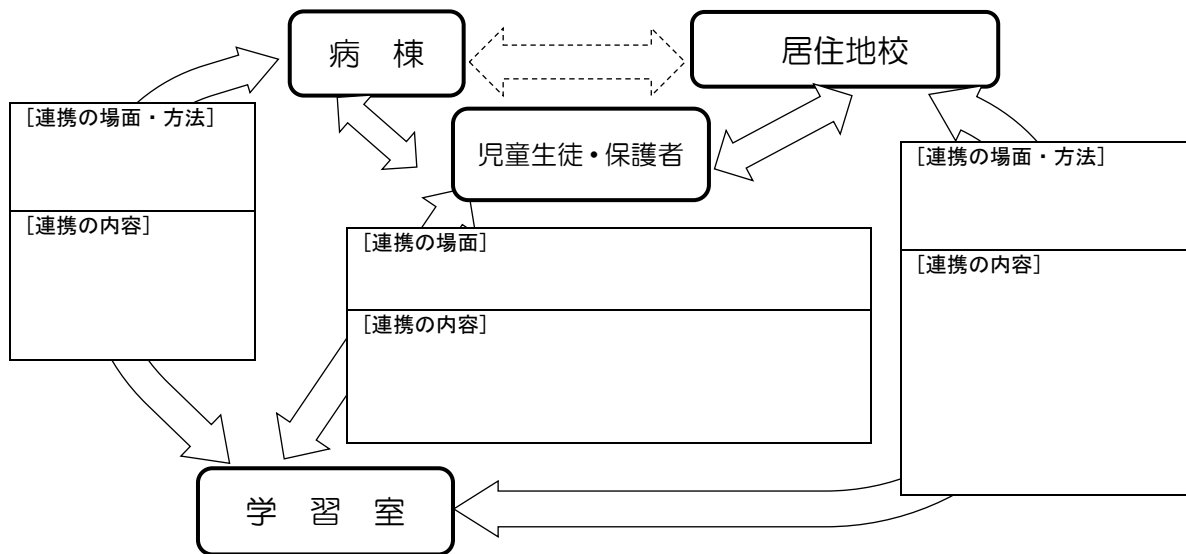
(2) 支援と連携

学習室では、治療の様子や生活面での変化等、実態把握をしつつ個別の教育支援計画、個別の指導計画（自立活動、教科）を作成している。「退院後の望ましい姿や生活」や「入院期間中の目標」に向け入院初期と退院間近では、目指す姿は変化していくと考え、実践事例では、入院期間を大まかに3つの段階に分け、それぞれの段階で目指す姿や支援について以下のように整理することにした。

	初入院初期	中間期	入院後期
目指す姿			
支援内容・方法	心理的支援：		
	学習支援：		
	復学支援：		

児童生徒にとって長期入院を余儀なくされた慣れない環境の中、安心感を得て初めて、学習や生活、人への思いやりなど視野を広げていくことが可能となると考えられる。支援を行うにあたっては、退院までの3つの段階を通して（初期の段階では特に）児童にとって安心できる環境づくりや働きかけが重要となってくる。

また、入院期間中は基本的に治療が最優先であり、学習や活動の際には児童生徒の体調面や心理面への影響の配慮が重要となる。入院初期から退院、及び居住地校復帰まで充実した支援を行うために、保護者、病棟、居住地校等関係機関との連携は必要不可欠となってくる。そこで、支援を行う上での連携の内容や方法について以下のように整理することにした。



関係機関との連携をもとに具体的な支援を行っていく際には、連携先との児童生徒の病状や治療予定等の個人情報のやり取りが重要になってくるため、保護者からは、書面を以て以下の2つに関する同意を得ている。

- ・病棟と学習室間で、直接児童生徒に関する病状・治療等に関する情報のやり取りをすること。
- ・居住地校と学習室間で、直接児童生徒に関する病状・治療・学習に関する情報のやり取りをすること。

2) 実践事例

(1) Aの実態

① 入院時の様子

居住地校	B市立C中学校 第1学年
入院の経緯	<ul style="list-style-type: none"> ・小学5年生の終わり頃、所見があり医大で検査を実施。経過観察となった。 ・令和元年5月、検査の結果、入院をして治療することになった。
入院時予定期間	5カ月
治療の状況	週1回、化学治療を行う。
その他の病歴	<ul style="list-style-type: none"> ・2、3歳頃から、医大附属病院の皮膚科を月に1度受診。 ・両手の指に拘縮があり、医大附属病院の整形外科を定期的に受診し、リハビリをしている。入院中の現在もリハビリは継続。運動は制限されている。
学習室利用	学籍を本校に移し、体調に配慮しながらできる限りの学習保障を行う。

② 入院時の母親との面談より（成育歴等）

- ・ 3歳児検診時に言葉の発達で引っかかり、療育センターで検査をした。その際、将来集団生活で困ることがあるかもしれない、と言われた。
- ・ 幼少期より、自分から何を言ったらいいかわからない、表現できない、という様子があった。
- ・ 自宅での留守番などがいまだに不安であるなど、中学生にしては不釣り合いな幼さがある。入院当初は母親が付き添いを離れることができなかった。
- ・ 中学校では友達とのトラブルなどはないが、これまでも特定の仲の良い友達はおらず、誰でもいいといった印象がある。人付き合いに苦手さがある。
- ・ 「前はできたのになんで今できないの？」のようなことを言われると、固まってしまう様子がある。
- ・ 毛筆が得意。地域のさんさ太鼓の団体に所属し小学4年生からさんさ祭りに出場している。

③ 入院当初の学習室や病棟での様子

- ・ 母親の話では、極端な人見知りや話が苦手等の実態が話されたが、個別学習等で学習室職員に対しては、言葉数は少ないながらも、友好的な態度で接しようとする様子が見られた。
- ・ 中学校での集団の授業で発言することが苦手だったが、学習室の1対1の授業では教師の問いに答えたり自分から質問したりするなど意欲的である。課題にも自分から取り組んでいる。一方で、勉強はやるべきものと頑張りすぎる様子も見られた。
- ・ 毎朝担任が病室を訪ねて行く健康観察で「今日の調子はどうですか？」などの問いかけに、笑顔を見せるが、自分では答えず、母親の顔を見て代わりに答えもらおうと助けを求めることが多い。

(2) 支援の方針

入院期間の初期から後期にかけての各段階におけるAの目指す姿を以下のようにイメージした。また、目指す姿の実現に向けて、学習室での支援の内容・方法について次のように考えた。

	初入院初期	中間期	入院後期
目指す姿	<ul style="list-style-type: none"> ・ 安心して職員や他の児童生徒と関われるようになる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 体調がよいときは意欲的に学習を行う。 ・ 体調不良時はそれを乗り越えたときの目標を持つ。 ・ 学習室内での役割を果たす。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 復学後のイメージを持つ。
支援内容・方法	心理的支援：Aにとって答えやすい質問の仕方の工夫。普段の会話から自然なコミュニケーションを図る。余暇活動の充実。（トランプ、アイロンビーズなど）仲間づくりの場の提供、楽しい時間の共有。		
	学習支援：抵抗なく学習を進められるようC中学校で使っている教材の継続使用。C中学校の各教科担による定期テスト等各種テストの採点。学習支援：		
	復学支援：C中学校との交流。（文化祭作品交流等）復学支援会議の開催。（日程の調整。復学に当たっての要望、不安なこと等の聞き取り）		

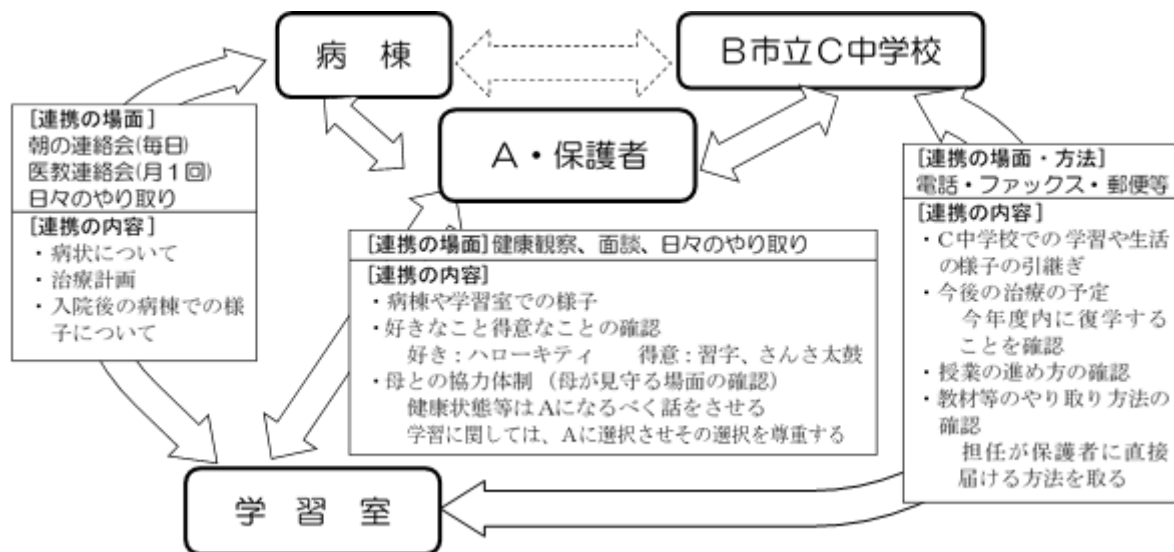
(3) 各入院時期における連携の形態

① 入院初期の連携

入院直後の不安の多いなか安心して学習室を利用できるよう、Aにとって楽しいことや好きなこと、得意なこと、また、話題にしてほしくないことなどを保護者及び居住地校から情報収集し、学習指導や普段の関わりに取り入れた。また、病棟からAの病状や治療計画などの情報を得た。

学習室で、Aの学校生活をスムーズにスタートできるよう保護者や関係機関である居住地校、病棟との連携の基盤づくりが重要な時期である。特に毎日連絡を取ることが難しい居住地校とは、連絡手段やプリント類の受け渡しなど今後の連携の方法について確認を行った。

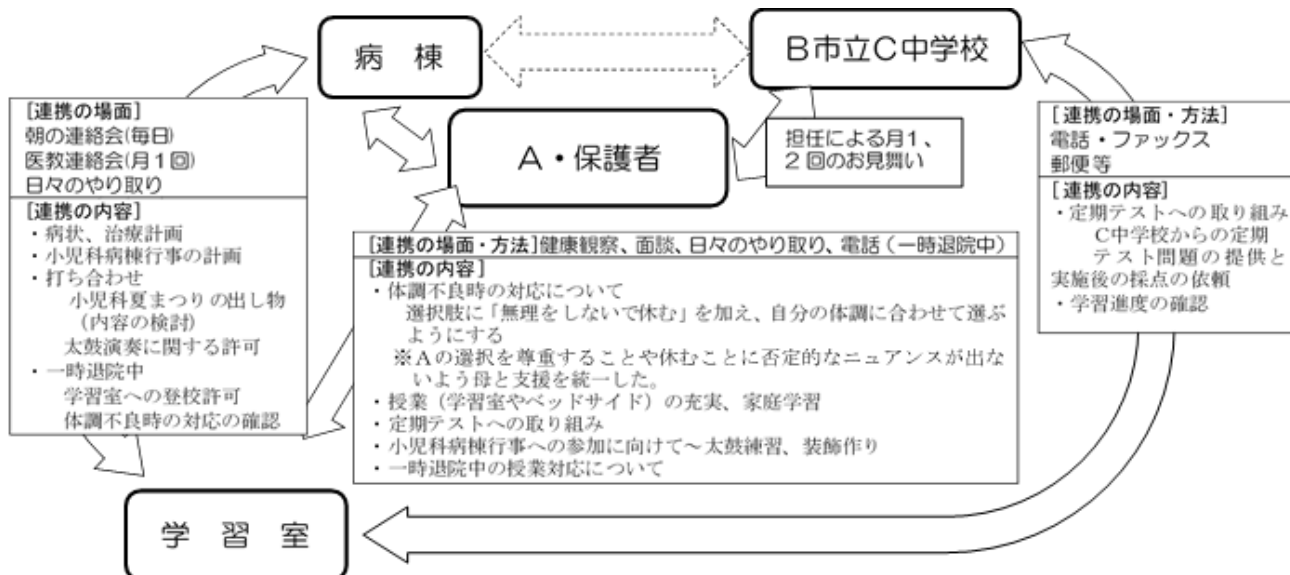
<入院初期の連携図>



② 中間期の連携

治療が本格化し、体調がすぐれないことも多くなる時期である。一方で、学習室での個別指導の授業形態にも慣れ、病棟行事や学習室での校外学習、訪問授業などに見通しを持って取り組めるようになる時期でもある。Aが楽しみとしている日々の授業や行事参加ができるよう治療など調整を図っていただいた。また、保護者・居住地校へもAの学習室での様子や頑張りやを伝えた。一時退院中の学習支援なども病棟、保護者との綿密な打ち合わせの上、出来る限り対応をした。

<中間期の連携図>



③ 入院後期の連携

治療が終盤を迎え退院の目処が立つ時期。居住地校への復学が近づくにつれ、楽しい気持ちが出てくる反面、学習面の遅れや副作用による容貌の変化が気になり、復学への不安も募ってくる。なるべく不安なく復学できるよう、Aにとって必要な入院後期の連携内容・方法についてワークショップ形式の事例検討を行った。

【 事例検討会の実施 】

<第5回 グループ研 (9月12日)>

検討会では、連携図を使いAの入院後期に必要なと思われる内容・方法について話し合いがなされた。Aの初期・中間期の連携の実践を振り返るとともに、関係機関の立場にも立って実際の復学に当たりどのような連携が必要かを学部職員一人一人が考えた。その個人ごとの考えを、一つの連携図にまとめることで、入院後期に手厚く連携していかなければならない部分を明確にすることができた。事例検討によって、以下のような連携の方針と図に示すような連携の具体的方策が確認された。

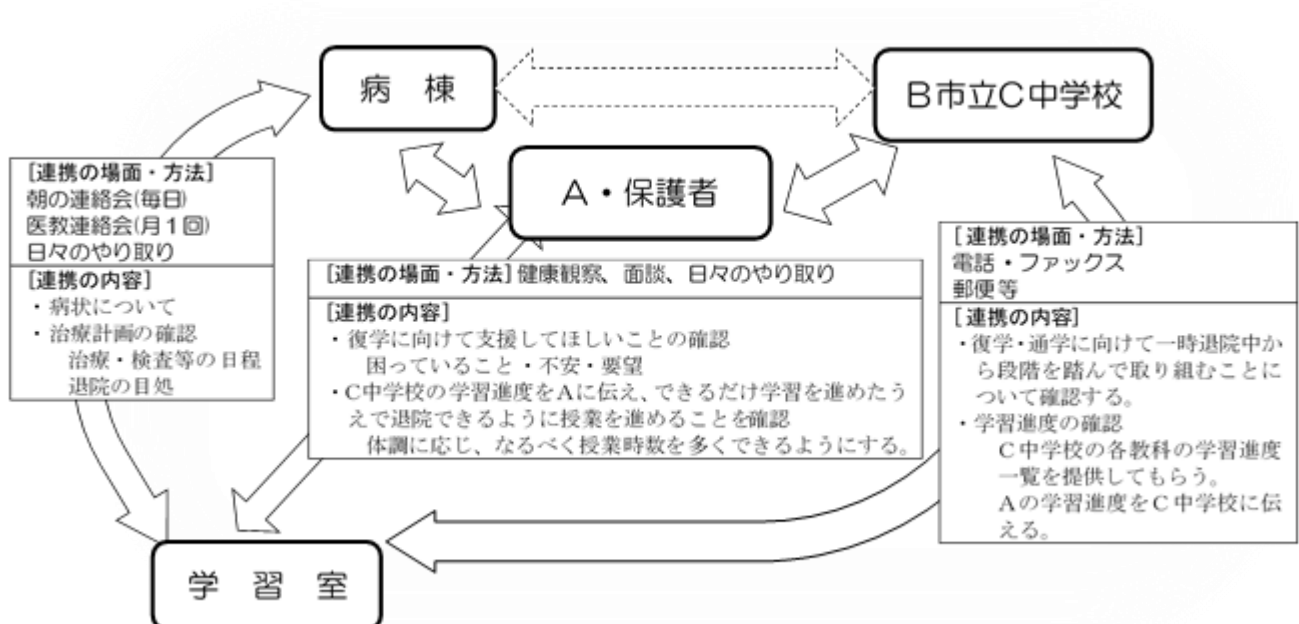
<連携の方針>

心理面：Aや保護者が復学を目前にして“不安に思うこと”だけでなく、“楽しいこと”や“やりたいこと”にも目を向け、その両面を関係機関が共通理解して復学を支援できるようにする。

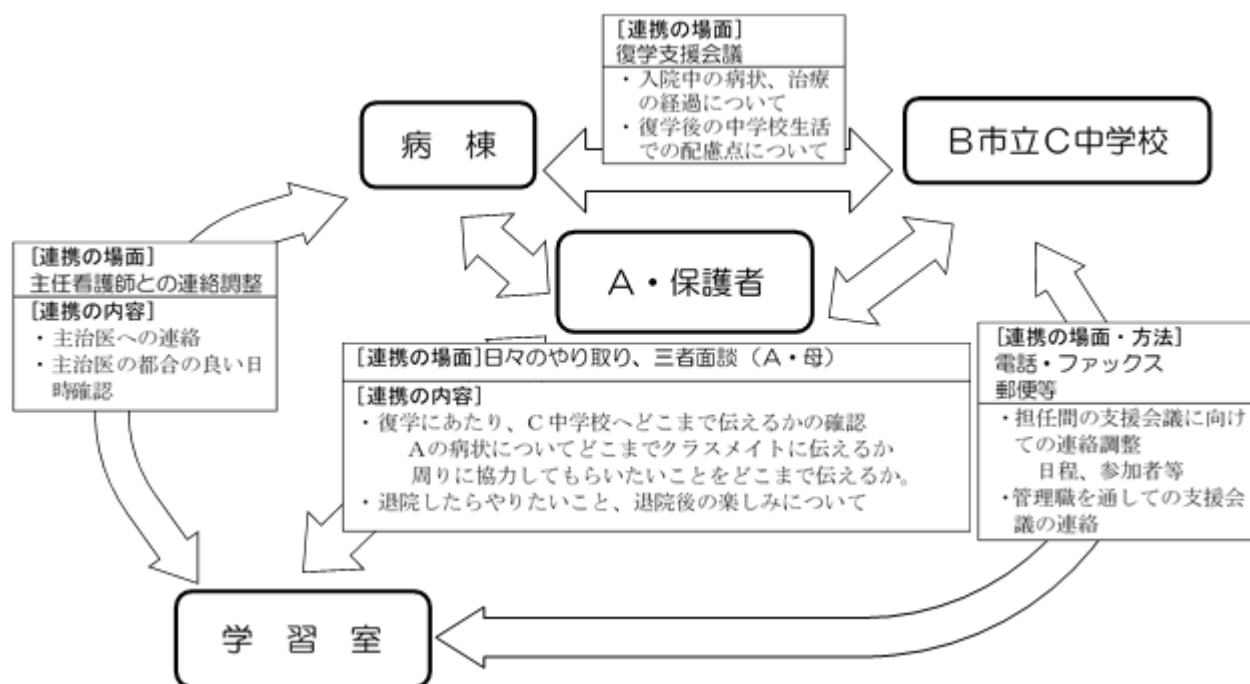
学習面：遅れを最小限にするよう学習室在籍中にできるだけ進めるとともに、入院中からC中学校にAの学習進度を知らせ、復学後にC中学校でもフォロー体制が必要であることを知らせていく。

復学：Aが復学後のイメージを持てるよう、また、C中学校が安心してAを迎え入れられるよう、関係者が一堂に会しての復学支援会議を実施する。これに向けて関係機関との日程や内容等、関係者間の連絡調整を行っていく。また、日々の健康観察等でAや保護者から話されたことを電話等で折に触れてC中学校に伝えたりするなど橋渡しの役割をしていく。

<入院後期の連携図>



< 復学支援会議の連携図 >



(4) 各入院時期における支援例とAの変容

① 入院初期

ア 支援の方針

Aにとって負担の無いコミュニケーションを心がけ、楽しめる活動を通して、学習室での関わりを持てるようにした。このような支援を行うために、関係機関から得た情報を元に支援の内容の模索、環境づくりを行った。

イ 入院初期の支援例

支援場面	支援内容
健康観察	<ul style="list-style-type: none"> ・ Aが答えやすい質問の仕方の工夫。(クローズドクエスチョン・選択肢を示す・質問をパターン化する) ・ 母はAの代わりに答えることをせず、「言ってごらん」と励まし、答えるのを待った。
学習室での初授業	<ul style="list-style-type: none"> ・ 得意な習字を生かして、新元号「令和」を書き、内閣官房長官風に写真撮影。 ・ 作品を病棟廊下に掲示し医療スタッフ、他の患者、患者の保護者に鑑賞してもらった。

ウ 入院初期を通してのAの変容

心理面：治療の開始にあたり、中心静脈カテーテルを入れる手術への不安などから、Aの気持ちに落ち込みが見られた。一方、初めての授業で書道に取り組み、楽しく過ごしたことで、治療を離れ楽しく過ごせる場所として学習室への登校に対する良いイメージを持つことができた。

行動面：母に任せたいという気持ちはあるが、母が見守りの姿勢を示すことで、健康観察等は自分で意思表示する場面と捉え、頷いたり、短い言葉で答えたりするようになった。

学習面：登校し始めは、Aの得意とする書道等実技教科も積極的に取り入れた。改元直後だったことから「令和」の文字を書き、病棟廊下に掲示した。これを見た病棟スタッフ、他の入院患者の保護者等に褒められたことで、自信を持ち笑顔でいることが多くなった。

② 中間期

ア Aの実態及び支援の方針

Aの実態：Aの入院初期を経てAは学習室職員とのやり取りがスムーズになり、自分の気持ちを少しずつではあるが職員に話したりすることができるようになった。

支援の方針：Aの得意なことや好きなことを生かして、学習や活動の充実を図った。治療により体調の辛い時期もあるが、一緒に学習する学習室での仲間の存在も励みとなるように配慮した。

イ 中間期の支援例

支援場面	支援内容
授業（国語）	<ul style="list-style-type: none"> 文章表現の苦手さの軽減のため、「わかりやすく説明しよう」ではAが好きなハローキティを題材に取り上げた。 1対1の授業ではあるが、他の生徒への意識をもって学習を行うことを目的とし、学習室の他学年の生徒に授業協力を依頼した。その生徒に説明をすることを想定し、分かりやすい文章表現をするようにした。
定期テスト	<ul style="list-style-type: none"> C中学校で実施した定期テスト問題を提供いただき、学習室でテストを実施。実施後のテストの答案をC中学校へ送り、各教科担当が採点し、返却してもらった。 体調に合わせて、1日1教科（50分）ずつの実施とした。
小児科病棟行事に向けての取り組み （小児科夏まつり）	<ul style="list-style-type: none"> 学習室の友達と一緒にさんさ太鼓発表に向けて太鼓や司会の練習や、他学年の児童生徒と太鼓の飾り学習室の看板づくりを行うことで、仲間としての意識を高めた。 太鼓の叩き方など、他の児童生徒とどのようにしたらよいか意見を出して話し合うことで、自分たちの力で行事を成功させるという意識をもたせた。 練習やリハーサルをすることで、小児科の患者、患者の保護者、医療スタッフの前で司会やリード太鼓の役割を自信をもって果たせるようにした。
一時退院中の学習支援	<ul style="list-style-type: none"> Aと保護者の希望により治療の合間の1週間程度の一時退院中、主治医の許可を得て、Aが医大学習室に登校して授業を受けた。

ウ 中間期を通してのAの変容

心理面：同年代の仲間が学習室に入ってきたことで、学習室に登校したいという意欲が高まった。多少具合が悪くても登校し、友達と過ごすことが楽しそうであった。また、体調に応じて、休むことも選択肢に入ったことで、「自分で授業を休むと決めてもよいのか？」との葛藤もあったが、母や看護師に休む選択を尊重してもらえることで、安心する様子が見られた。

行動面：手術を控え不安そうな友達を励まそうとの思いから、自分の手術の経験を手紙に書き、励ましの言葉を添えて渡した。自分から話すことや友達への関心が薄いと思われていたAの行動面での成長が感じられた。小児科夏祭りへの取り組みを通して、発表のリーダーを務めた。それまでは関わりのなかった小学生の児童とも協力して、太鼓練習や装飾作りに取り組み、楽しそうな雰囲気でお話する様子が見られた。他の児童生徒との協力によって、行事を成功させることで、所属感や達成感を味わうことができた。

学習面：Aにとって初めての定期テストであったが、自習も頑張り各教科で高得点を収めた。C中学校の教科担当が採点した答案を返されたことで、C中学校の採点の基準を知り、自分の学習を振り返ることができた。また、各答案には教科担からの「頑張ったね」等のコメントが添えてあり、C中学校とのつながりを感じ、自分の学習に自信をもつことができた。

③ 入院後期

ア Aの実態及び支援の方針

Aの実態：入院生活の中で、治療を頑張り乗り越えてきた経験や同じように病気と闘っている同年代の友達の存在が励みとなり、入院初期に比べたくましく自信をもって行動する場面が増えてきた。一方で、C中学校の学習進度から遅れてしまっていることや、頭髪が抜けてしまっていることなど、復学が近づく中で不安なことも少しずつ意識されるようになった。

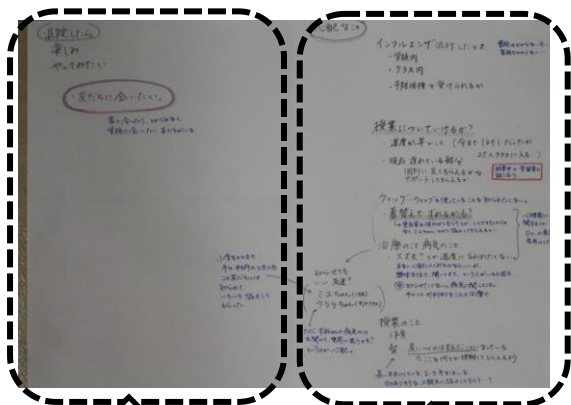
支援の方針：体調の回復に合わせて学習を進めるとともに、復学に対するイメージを持つ。その際、不安や気がかりなことが多く感じられることがあると思われるが、C中学校に戻ってやりたいことや、入院生活で身に付けた自信をもてることなども併せて話題にし、復学への期待を高められるようにした。また、“「復学する」とは、子どもが一人の力では対応しきれない状況になること、と同義である”と捉え、復学支援会議を開催し関係機関が一堂に会した場で、Aの復学支援について話し合う機会を設けた。

イ 入院後期の支援例

支援場面	支援内容
三者面談 (10/30 実施)	<ul style="list-style-type: none"> ・復学に当たっての不安や楽しみなこと、学校に伝えたいことなどを、図に整理しながら話し合った。(資料2) ・不安なことに対しては、「どんな助けがあれば大丈夫と思えるか」を考え、楽しみなことについても支援会議の場で話題にすることとした。
復学支援会議 (11/1 実施) 参加者：A・Aの両親、 C中学校[副校長・担任・養護教諭]、 病棟[主治医・主任看護師]、 学習室[主任・担任]	<ul style="list-style-type: none"> ・主治医から、入院中のAの治療の経過、退院時の体調、C中学校に戻ってからの留意点等の説明があった。 ・Aと両親から、学習の遅れや頭髪が抜けているためウィッグを付けて登校することに対する不安、C中学校に配慮してほしいことなどが話された。 ・C中学校から、Aの受け入れについての、衛生面・心理面に必要な配慮について主治医への質問があり、復帰に対するAの不安に対しての対応について、今後検討していくことなどが、話し合われた。
自立活動 (11/19 実施)	<ul style="list-style-type: none"> ・支援会議を振り返り、復帰に関する中学校生活の具体的な場面などを確認し、そこで想定されることや対処方法(ウィッグがずれた時などどうするか)などを話し合った。 ・クラスメートに伝えてほしいこと、伝えてほしくないことなど確認した。 ・三者面談時の図を用いて入院生活で頑張ったことや成長した点など振り返り、自信につなげた。(資料3)

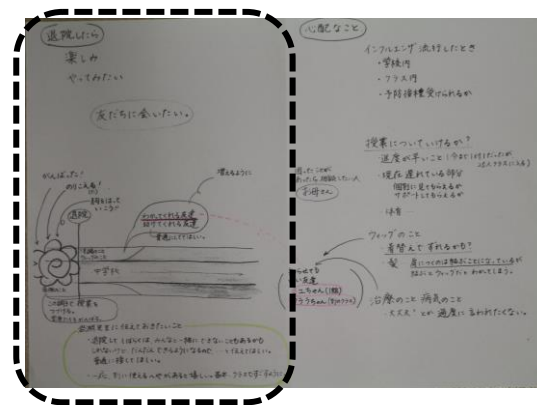
(資料2) 三者面談時 (10/30)

(資料3) 自立活動 (11/19)



楽しみなこと

不安なこと



楽しみなこと・良い状況を増やすためにできること

三者面談時(資料2)は、“退院したら楽しみなこと”(左側)の部分が少なく“不安なこと”(右側)の部分が多かった。支援会議後の自立活動(資料3)では、“楽しみなこと”に加えて、“良い状況を増やすためにできること”(右側)の部分について、多く話し合うことができた。

ウ 入院後期を通してのAの変容

心理面：復学の際はウィッグを付けて登校しようと話し合った際、母がウィッグであることが周りに知られるのではないかと、いじめやからかいの対象になるのではないかと心配したのに対して、Aは「実際に行ってみないと分からない。」「少しぐらいならウィッグであることを友達に知られてもいい。」と話すなど、ポジティブな発言がみられた。

行動面：退院前に中央静脈カテーテルを抜去する手術があったが、母の付き添いがなくとも一人で手術に向かうなど、これまで治療を乗り越えてきたたくましさを感じられるようになった。また、学習室の友達とのかかわりを楽しみ、朝の会の当番や発表の際の声掛け係などの役割も堂々とこなすようになった。

2 講師を招いての研修会

<はじめに>

昨年度は、精神科医を講師に招き研修を行ったが、今年度は小児科医を講師に招き、小児科医の立場から小児病棟に入院中の児童生徒に特化した話を伺う機会を得た。

期 日： 令和元年12月13日(金) 13:30~14:30

場 所： 岩手医科大学附属病院 学習室

講 師： 岩手医科大学附属病院 小児科医局長 石川 健先生

テーマ： 「発達障がい等により心理、行動面で配慮を要する児童生徒とその保護者への支援のあり方について～教育に期待すること～」

(1) 入院中の子どもたちに関すること

- ・小児病棟に入院している患者を診ていると、身体症状が出ている場合、発達障がい関わっているケースが多い。
- ・頭痛、吐き気などの身体症状が見られる場合には、必要な検査を行い、どういう場面で変化があるか注意深く診ていく。それらの症状が、心の問題からきているものかの見極めが難しい。子どもの訴えに振り回されると過剰な診療につながる。
- ・身体症状が現れている子どもに対して原因は何にせよ、苦痛を受けているという点で同じであるという認識をもつことが大切である。
- ・女兒と母親の間でよく見受けられるケースでは、主治医からの質問に母親が応えてしまったり、母親の顔を確認したりするといったことがあり、依存度が大きいいかどうかも観察のポイントである。親子が共依存しているケースでは本人の自立を促す方向で支援している。
- ・小児科医の立場で児童精神科医とは異なる視点で「つながりが途絶えないよう、細く長く診ていく」ことにより、必要なときに専門医や専門機関、地域のネットワークなどへつなげることができる。

(2) 発達障がいへの対応に関すること（教員に知っておいて欲しいこと）

- ・できるだけ早期から対応することが望ましい。ライフステージを通して途切れなく支援し、専門機関へつないでいくことと同時に、地域で支える「かかりつけ医」等医療機関での受診を勧める。
- ・発達障がい本人と家族に与える影響としては、本人だけではなく家族が発達障がいを抱えている場合もある。母（主となる養育者）を責めるのではなく、これまでの養育を労ったり、母のストレス軽減などへの対応をしたりすることが重要である。
- ・就学前に支援を開始した場合、成人期での社会参加が良好である。早期に発見されずに来た場合は、思春期になって学校や生活の場面で何らかの困難を抱えているものの、本人も周囲も根底に「発達障がい」があることに気づかず、周囲から誤解を受けている場合も多い。
- ・地域のネットワークを活用し、親への支援に当たることが必要である。
- ・望ましい対応としては、静かな環境を準備することや、待ち時間が長くないような工夫や特性を受け入れた支援が有効である。
- ・有効な支援の方法として、必要な情報は絵カードや写真など伝える、箇条書きにする、伝わっているかどうかを確認しながら進めるなどが望ましい。このような小さな積み重ねが信頼関係を生み、安心して診察（授業）を受けることにつながる。

(3) 自閉症スペクトラム（ASD）autism spectrum disorder について

- ・ASD 閾下の自閉症特性を有する子どもへの支援も念頭に置いてほしい。知的な障がいを伴わない女兒などいわゆるおとなしいタイプの場合には、コミュニケーションの困難さが表面上に現れにくいいため、見過ごされがちになる。診断が遅れ、身体症状が出てから受診するケースが散見される。
- ・ASD の特性として感覚過敏、鈍麻がある時には、集中できる環境を整えてあげたい。
- ・知的に境界級であると前思春期あたりから周囲とコミュニケーションがとれずに、二次的にうつ状態になったり、不安障がいになったりしがちである。
- ・社会参加できるような力やコミュニケーション力を付けることが大事である。

- ・青年期以降に ASD と診断された家族への対応では、本人、親のショックが大きく、母親の不全感、自責感から孤立しがちであることから、これまでの養育に対して母の責任ではないことを伝え、ねぎらう。言い換えれば、周囲が対応を変えることによって、社会適応に結びついていく。

(4) ライフコースを通じた多職種による地域支援

- ・発達障がいとは発達の仕方にてこぼこがある。周囲が彼らの特性を理解し、サポートしていくことで、「障がいをもちつつ適応していく」という視点を持ちたい。
- ・乳幼児期→児童期→青年・成人期→老年期まで途切れなく支援できることが望ましい。

VII 研究のまとめ

1 成果

(1) 実践事例検討会に関すること

- ・グループ（学部）内で対象者を絞り支援の実際を振り返り、目標設定や手立て、成果、課題について多角的な視点で論じ合うことを通し学びを共有するとともに、各自が受け持つケースの参考にもすることができた。
- ・入院当初から年度内に居住地校に戻る児童生徒であるという共通の認識を居住地校ともった上で協力し合えたのはよかった。
- ・連携の構図を図式化することにより、支援に際し「どの機関と」「何について」「どのように」協働しているか、またすべきかが明確になり、他のケースにおいても般化できるモデルとなった。
- ・病棟や保護者、居住地校との連携がうまくいったことにより、自宅療養期間中に学習室に通うことで学習保障ができたことは、学習進度の遅れに対する不安を軽減させる助けとなり、居住地校へのスムーズな適応へとつながった。

(2) 講師を招いての研修会に関すること

- ・概論ではなく具体的な事例やエピソードに添えて、医師の立場で率直な考えや思いをお話しいただき共感したり感銘を受けたりしたところがとても多かった。「ただただ診ていく」というのはとても合点のいく言葉であり共感することができた。
- ・児童生徒のみならず、保護者に対して向けられる温かい視線や労いの気持ちがきちんと伝わっているからこそ、保護者も児童生徒も関わりのある医療従事者を信頼しているのだとあらためてわかった。保護者との信頼関係を築き保っていることは教育の場で最も重要なポイントであることを再認識することができた。
- ・児童生徒の主治医ともなっている医師の話聞き、支援のあり方や思いについて事例を交えながら説明していただき、発達障がいをもつ児童生徒への理解を深めることができた。児童生徒だけでなく親に対しても、よりよい支援や気持ちに寄り添う姿勢が大事であることを再認識することができた。
- ・本人の訴えと身体症状の見極めについて医学的な裏付けがあることがわかり、身体症状が現れている児童生徒に対して原因は何にせよ、苦痛を受けている点では同じであるという認識をもつことは大切だと分かった。
- ・発達障がいのある児童生徒に小児科医としてどう関わっているのか知ることができた。また、発達障がいをもつ児童生徒とのかかわり方のポイントを具体的に教えていただき、学びを深めることができた。現在学習室を利用している児童生徒に生かすことができた。

2 課題

(1) 実践事例検討会に関すること

- ・関係機関とは、良好なパートナーシップを保っていくためのバランス感覚を要する。
- ・復学支援は入院直後や治療で辛い状態にある時は適さないが、退院直前になって具体的な課題が明らかになってくるケースがままあるため、早期の段階からタイミングを見計らって計画的に行う必要がある。
- ・医療用ウィッグをオーダーメイドする際に、居住地校へ復帰することを考慮し、校則に則った髪型にするのが望ましいことなど、具体的な点についても復学支援の一環として情報提供できるとよい。
- ・治療計画が確定するまで時間を要するケースがあり、目標を段階的に設定できず、対応の難しさがある。
- ・長期のブランクや容貌の変化などにより、復学に前向きになれない児童生徒や保護者が例年少なからずおり支援の難しさがある。

(2) 講師を招いての研修会

- ・石川先生には、日頃から児童生徒への学習保障に気を配った対応をしていただいている。先生の教育への期待の大きさをあらためて実感した。今後も指導、助言をいただきながら児童生徒の教育にあたっていくことが大事である。
- ・発達障がいや精神面に配慮を必要とする児童生徒を対応する際に、医療的立場からの情報等を得、さらに今後もより一層支援体制を整える必要があると感じる。
- ・目に見えづらい症状を抱えた子どもの健康観察の難しさを感じる。本人は頑張りたいと言うが、それが心理的に負担になっているのではないかと感じたり、苦しくてもやりたいと思う気持ちもないがしるにはできないと思ったりする。

VIII おわりに

平成 30 年度より、関係機関との連携の在り方について研究を行ってきた。1 年次には、他病院の実践や病院関係者による研修会から支援方法や連携について学んだ。2 年次では、1 年次で学んだことを基に、実践検討会などを行ってきた。今回の研究を通して、病院訪問教育は保護者、病院関係者はもちろん、居住地校など関係機関の協力なくして成り立たないことを改めて実感した。今後も児童生徒個々の関係機関と、「どこと」「どのように」連携すべきかについて考え続け、支援にあたりたい。